

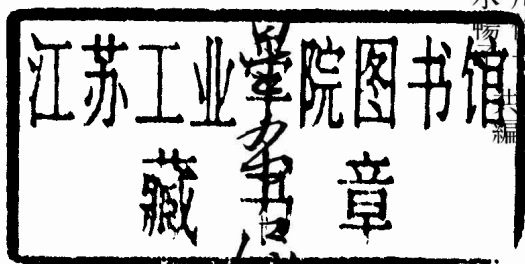
矢羽勝幸・柏川修一
小磯純子・船水暢子
共編

榎本星房句集

古典文庫

矢羽勝幸・柏川修一
小磯純子・船水暢
共編

複本



畢力
句集

古
典
文
庫

平成十年八月二十日印刷発行

非売品

集句尼布星本榎

編者

矢羽勝一
柏川修一
小船磯純子
船水暢子

発行者

吉田幸一

印刷者

共立印刷株式会社

製本者

(有)武蔵製本

発行所

114

0024 東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 〇三(三九一〇)二七一七
振替口座 〇〇一九〇九一二四五九七番

目次

	はじめに	三
	凡例	七
一	『星布尼句集』（喚之編）	九
二	『美登里能松』	五三
三	『七とせの秋』	七一
四	『松の花』	九三
五	『蝶の日かげ』	一一五
六	『雛・田植・たなばた・おしの句あはせ』	一三七

はじめに

榎本星布（一七三二—一八一四）は、八王子市横山町の人。継母仙朝（鳥酔門人）の感化から俳諧に入り、白井鳥酔に師事、明和六年鳥酔の没後は同門の逸材加舎白雄に従った。八王子の津戸家から婿養子信親を迎えたが明和七年これを失い、俳諧一筋に生きた。天明八年白雄の後見により鳥酔晩年の号松原庵を継承、寛政三年還暦を機に髪を下ろし星布尼と称した。

生前一子喚之が編集、刊行した『星布尼句集』は、星布の名声を高めるに有効であつたが、白雄の影響の大きさ、両者の資質の近接していたことを証している。その故か、近代の星布伝に両者が恋人ないしはそれに近い関係にあつたことを記すものが多いが、星布傘寿賀集『春山集』の序によると、「白雄氏ハ嘗テ言有リ。蕉翁ニ園女有リ、鳥酔ニ星布有リ、吾ニ几秋有リ。」（几秋は武蔵毛呂の白雄門人川村碩布の妹）とあつて、白雄自身鳥酔門の女流として重んじていたが、門人としては几秋の方が親密な存在であることを記している。

星布は、生涯刊行する俳書七部、個人発句集一部と女流ながら並みの男性宗匠顔まけの堂々

たる俳諧活動を展開している。世にいまなお喧伝されている園女、千代女、菊舎、多代らと比較してもこの部数の多さや活動の多彩さは群を抜いている。

星布の秀拔さはむろん俳書の多さだけではない。何よりもその作品の質の高さが雄弁に物語っている。

雉子羽うつて琴の緒きれし夕哉

海にすむ魚の如身を月涼し

蝶老てたましる菊にあそぶ哉

凍蝶や桜の霜を身のおはり

遠雪吹松風襟にいりしより

星布の著作の中には句合高点集が多い。これもまた星布の俳業の大きな柱として、俳壇一本化の問題の中でとらえ直さなければならない。

文化十一年十二月二十八日、八十三歳の高齢をもって八王子の松原庵で没した。墓は元松原町の大義寺にある。

星布は、早くから高い評価を与えられ、注目されていた割合に安易な作品鑑賞ばかりで本格的な研究が少ない。管見のかぎりでは唯一天野雨山氏の「星布尼新考」（俳誌「蕉風」連載）が光るぐらいであろう。活字化されている『星布尼句集』も誤字・誤植が多い。

私は白雄研究の一環として学生時代より白雄周辺の俳人の著作、資料を蒐集しているが、平成八年二松学舎大学の大学院博士前期課程の近世文学特殊講義で近世中・後期俳諧を講義した。本書の校訂者小磯純子（相模女子大学文学部助手）・柏川修一（明星高等学校教諭）・船水暢子の三氏はその受講者で、近世文学を専攻している。講義の折星布の真価に及び、協同研究として星布の著作を集成しようということになった。以前から集めていた資料を提供、分担をきめ、不足の資料は各自が補完、翻字、さらに交代読み合わせ等をへて、平成九年十月原稿が完成した。

今日の星布研究の遅れは、やはりその著作集が完備していないところにある。おいおい発句・連句集成、年譜、伝記と公にしたいと思っているが、これら基本資料をもとにより正確で魅力的な星布像の現われることを冀う。

平成九年霜月

矢羽勝幸

凡 例

一、本集には榎本星布の著作及び関係資料『星布尼句集』『美登里能松』『七とせの秋』『松の花』『蝶の日かげ』『雛・田植・たなばた・おしの句あはせ』『都鳥』『ふぐるま』『四季発句集』『春山集』の十部を収めた。

一、翻刻するに当り、おおよそ次の方針をとった。

1、本文の翻刻については、できる限り原本に忠実にと心掛けた。

2、漢字の異体・略体文字・合字・古字の表記は、できる限り現行の活字体に従った。また、おどり字「ゝ」は「々」に改めた。

3、平仮名の表記の中に、片仮名表記（セ・ツ・ハ・ミ・ヤ・ン）がある場合は、そのままとした。

4、誤字、脱字、仮名遣いの誤り、衍字などは、原本のままとし、できるだけ右傍に（ママ）を附した。

5、虫損・版欠け等で難読の箇所には□を施し、推定または判読が可能であれば、その中にその文字を示した。字数の不明な時は、「―」であらわした。

6、詞書・序文・跋文には、適宜句読点を施した。

7、原本の改丁は（―）を以て示し、その丁の表・裏を、オ・ウとして、丁付とオ・ウとを小字で入れた。

一、巻末に、収録作品の書誌を記し、私見を加えた。

一、『四季発句集』では句の上に線を引き、「キンレイシャ」「モヨウシ」とカタカナで記す部分がある。その部分には※印を付し、二字下げとした。

一、原本の閲覧、利用につき、富山県立図書館（志田文庫）・天理大学・諏訪神社・講談社松本文庫・他所蔵図書館より多大の御配慮を賜った。

一『星布尼句集』

喚之編

星布尼句集
上

羊駝^ト榎^{シテ}大家。好^ミ俳諧^ヲ俚^ヲ詠^ヲ一^ニ号^ニ松原庵^ト星布^ト。
元^ト称^{シテ}糸明^ト窓^ト樂^{ムコト}六十年一日先^レ是^{ヨリ}五^ニ六^ニ七^ニ年^ニ春秋庵^ニ白雄^ク授^ヲ旧号^ヲ。即^チ今^ノ庵号^{ナリ}也。其^ノ好^ム
(二オ)樂^ノ之^{シキ}久^ク。詠^ヲ稿^ヲ堆^ヌ積^ス。男^ヲ喚^ヲ之^ヲ請^ヲ刻^ヲ以^テ
伝^フ焉。実^ニ後^ニ進^ニ領^ニ袖^ニ也。

癸丑^ノ之^ノ秋武陽峽北津戸菅為貴識

⑩ ⑩ (一ウ)

も、たらしいきとしいける人の子としては、
なにことにまれ、かそいろはのしわさを、う
つくしもおもはすやはある。あか朝よひ仕へ
まづるは、としハよ、初草のまたうら若き頃
より、はいかいをこのミで、こゝらの年月よ
み置給へるは句のあまたあめるを、しミには

ませて、あとなくせんはいかに(二オ)かな
しからすや。さるをおもひて、うひまなひの
時よりのを、ひとつものこさて、こたミ板に
ゑりつけツ。もはらうツそミのよの人に、し
ら菅のしられんとしもたはかりたるにはあら
すけり。

寛政五くりの年長月むさしの国八王子なる
榎本喚之しるす。

⑩ ⑩ (二ウ)

星布尼句集かみつまき

(春之部)

うらやすのやすき御国のいまし御代、ハ
や春の始めのことほきとて、門くハ
松たてならへ砂うちまきて、人のゆき、
もおのつからうら、かになん。そか中
あか庵ハ松のはらくと竹の折曲垣かり
そめ鑽て、はかま着たるおのこ、うちか
けきたるをミなのとふへくもあらず。
かゝる家にも春はきにけりとひとり興し
て

わか門は生の松をしかりかな

喰つミや中に月雪さくら炭

(三才)

天鷄声万里にひらきめわたる暁色いさま

しきおほ御代をほき奉りて

はツ日の出松によらさる人そなき

土佐日記に、たゝ波の白きのミそ見ゆる

とあり、こや白馬の節会をさしてなるへし

けさ波の白きを春のはしめかな

二節のこゝろを一句にせよと人のいひけ

るに

暁は去年あけほのハことしかな

春たつや我庵ハ松の蟹はらひ

星霜たちまち五十四歳、孫女弾琴老をな

くきむ、われもそが(三ウ)かたはらにこ

とほきをうたふ

はつ東風や常盤といふハ松の名

此句万葉四言にならふものよ

鶏人もいまをやつくるあけの春

門は松隣るさくらの花はいつ

はッ夢や我に見ぬ世の古人たち

いはひの枝をつかねつゝ、たらち雄の年賀

をことほく慶山ぬしに送る

十かへりの松見せ給へ神の春

(四オ)

ひとつの日

芹つみに国柳の処女等出んかな

狙公いとまなき世のあはれなり

うめ柳

吹いる、梅を葉や宇治拾遺

よその鞠垣にほろりとうめのはる

梅さきぬむしろたれたる四阿に

うめ柳はるの世間のしつかなり

里くれてやなきにつたふけふり哉

倡門楊柳に題す

雨艶に柳見て居るすたれかな

泥染のうへにしたるゝやなきかな

麗巴滝

滝のよにかゝる柳を四の緒か

画賛

なよひ来て柳にたてる宮女哉

(四ウ)